

シモンドンにおける深層心理学の影響

堀江 郁智

本稿は、シモンドンにおける深層心理学の影響を、ジャネとユングとの関係に着目して明らかにするものである。この問題は、次の二つのパートから構成される。まず、ジャネとシモンドンの関係に着目することで、解離という問題系がいかなる位置づけをシモンドンにおいてもっていたのか検討する。次に、ユングとシモンドンの関係に着目することで、分身という問題系がシモンドンのいう個体化の問題系とどのように関連しているかについて述べる。これにより、分身、解離という主題が、シモンドンの個体化論においていかなる重要性をもっていたかということが明らかになる。

1. 解離の問題系——ジャネとシモンドン

本章では、フランスの心理学者・精神科医ピエール・ジャネへの参照関係に着目しながら、シモンドンにおける解離の位置づけを示す。それにより、深層心理学のなかでもジャネに対してシモンドンが「特権的」なまなざしをそそいだこと、ただしその解離というアイデアについては一定の距離を置きつつ、分身という問題について考えていたということについて検討したい。

1.1 解離という現象について

まず、解離 (dissociation) という心理現象について説明が必要だろう。約言すると、解離とは、心理的な統合が失われた状態である¹。『DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引』によれば、「解離性障害は、意識の正常な統合、記憶、自己同一性、情動、知覚、身体の表象、運動の制御、振る舞いにおける分断かつ／あるいは不連続によって特徴づけられる²」。しかし、この定義は曖昧であるとの指摘がある³。また、そもそも本稿は精神医学の論文ではないから、日常の

言葉に言い換えることとしよう。一言で言うと、解離性障害においては、「自分がいつも自分である」という自己同一性が失われている。この障害の低位分類には、例えば、あの時の自分が何をしたのか覚えていない（解離性健忘）、突然にそれまでの生活環境から逃げ去る（解離性遁走）、複数の人格が一人の個人のうちに現れる（解離性同一性障害、いわゆる二重人格・多重人格）などがある。

また、ロス⁴は、病的な解離と健全な解離の二種類があるとしている。健全な解離（白昼夢に耽る、先刻に行ったことを忘れるなど）は、おそらく誰にでも起こりうることであるが、病的な解離（脳震盪後の健忘、性的虐待に関する健忘など）は、多くの人に起こることではない。この観点から、解離を病理として捉える観点は、一定の有効性をもつと思われる。

さて、解離を人間の病理として論じたもっとも初期の著作の一つは、テオドール・リボアの『人格の疾患』である⁵。リボアはフランスにおける科学的心理学の成立に貢献した人物であり、ジャネもリボアを高く評価し、またリボアから大きな影響を受けている⁶。簡単に言うと、リボアは、階層性・統合性の発達が生物進化において重要であったと考えるのだった⁷。この階層性・統合性が瓦解した状態を、リボアは解離と呼んだ。人格の多重化を、人格の解離現象であるとするようになったのも、リボアの病態心理学に由来する⁸。

リボアの強い影響下で書かれたのが、ジャネの『心理学的自動症』である⁹。本書は、実験心理学の観点から、カタレプシー、夢遊病、人格変化、ヒステリー、精神衰弱等の心理現象を分析したものである。ジャネの手法は「心理分析(analyse psychologique)」と呼ばれており、当時から観察と記述の正確性を高く評価されていた¹⁰。ジャネの腕前を見込んだ神経科医シャルコーが、サルペトリエール病院に心理学の実験室を作ったほどである¹¹。

さて、ジャネが今日の解離研究に先鞭をつけた人物であるというのは、アメリカ精神医学においては通説になっている。ただ、この通説において見逃されているのは、ジャネは1909年以降むしろ多重人格の存在を否定したという点である¹²。この点に関して、興味深い分析を行っているのがイアン・ハッキングの『魂を書きかえる——多重人格と記憶の科学』である。本書において、ハッキングは、ジャネの記述に関して、多重人格が双極性障害の特殊な事例であると最後は結論づけたことを強調している¹³。ハッキングによれば、多重人格の

消滅は、フランスにおいてはヒステリーの没落と、アメリカにおいては精神分析の勃興とかかわっている。本稿において、とくに重要であるのは、解離の原理は、フロイトの抑圧の原理と対立するモデルであったというハッキングの指摘である¹⁴。つまり、精神分析が無意識と呼ぶものに人格を認めるか否かという点において、両原理は対立しているのである。シモンドンが解離を支持するということは、フロイトのモデルに対して距離を取る、すなわち無意識に人格を認めることを意味する¹⁵。この点を、シモンドンの記述を実際に辿りながら、確認していこう。

1.2 分身あるいは幻影-人格

シモンドンにおける解離の位置づけを考えるに当たり、まず次の箇所に着目することから始めよう。そこでは、シモンドンが深層心理学をどのように受容しているのかが、明白なかたちで現れている。この記述は、博士主論文『形相と情報の概念に照らしての個体化』第二部第二章「心理的個体化」の最終節に現れる。

精神分析が無意識のように考えていたものは、実際は、反-自己、真の自己ではない分身のように見なされなければならない。なぜならそれは現働性に恵まれていないからだ。それは統合された活動の状態においてではなく、眠り、自動症的な行為を通してしか表現されえない。ジャネの人格の二分化の観念は、フロイト以降公認された無意識の観念よりも現実に近いのかもしれない。しかしながら、人格の二分化について話すよりも、人格の分身化、幻影-人格について話す方が良いだろう。それらは、現在の人格が二分化したものではない。それらは、別の人格、人格の等価物であり、その等価物は、私という場の外に構成されているのである。虚像が観察者にとっては、現実に存在しているのではなく、鏡の外側に構成されているように、人格の真の二分化が存在しているとしたら、第一状態と第二状態について話すことができないだろう。たとえ第二状態が第一状態よりも長い時間を占めているとしても、それは同じ構造を有しているわけではなく、第二状態として識別されることができる。(ILFI p. 286/279)

この箇所では、実際、非常に複雑な論理が展開されている。シモンドンは、精神分析とは異なる仕方での心的現実を考えようとしている。心的現実とは、フロイト流の無意識というより、むしろジャネが「人格の二分化 (dédoublément)」と呼んだ事象から捉え返される必要がある。しかし、それさえも十分ではない。というのも、シモンドンは「二分化」によってではなく、「分身化 (doublement)」の観点から人格を捉えることを促すからだ。ここでシモンドンは、A という人格が現実には二分されて A1 と A2 になるというより、B という A の分身が現実の外側に存在しているという着想を抱いているのである。

この発想は、次の二つのことを言い表している。それは、(1) シモンドンは、無意識という用語に依拠することなく、心的現実を説明しようとしているということ、そして、(2) シモンドンは、自己が分裂して二分化するというよりも、自己の外部に私の分身が存在していると捉えているということである。

このことは、シモンドンが解離という現象を考える時、二分化モデルではなく分身化モデルと呼べる枠組みで捉えていることを意味する。幻影 - 人格、とも書かれる分身という対象について、シモンドンはどのように考えているのだろうか。この問いに答えるため、私たちは、シモンドンとジャネの関係について精査することにしよう。それにより、二分化モデルの明確化を試みたい。

1.3 人格の二分化モデル——ジャネの解離理論

シモンドンとジャネに、解離への態度において共通点が見られる¹⁶。シモンドンが、フロイトと比較してジャネを好んでいたことについては、すでにシモンドン研究者のデヴィッド・スコットが言及している¹⁷。

シモンドンがジークムント・フロイトよりもピエール・ジャネを好んでいたのは、次の信念にもとづく。それは、ジャネが依然として「無意識の超個体的な性質」という現実にもっと近いということ、そして無意識をより力動的に、操作として、把握することで、二重人格障害をよりの確に定式化することができるという信念である。¹⁸

操作として、無意識を把握するというのは、具体的には、ジャネが催眠術を用いて、患者の心理現象を人工的に再現することに成功したことを指していると思われる。つまり、ジャネにとって無意識は、形而上学的・実体的なものであるというより、器具・技術を媒介として、経験的に操作することが可能な対象ということになる。それは、実験室の中の無意識と呼ぶのが相応しいのかもしれない。ジャネは、技術的操作の対象として無意識を捉えている。とりわけレオニーというジャネの有名な患者は、夢遊病状態の中で暗示をかけることで、レオニー2、レオニー3という別人格を呼び出すことができることが知られていた。レオニーについて、ジャネは次のように報告している。

この女の存在は、ありそうもないけれども現実であるようなまったく小説じみたもので、3歳の頃から、自然に夢遊病発作が出現していた。16歳からはあらゆる類の人々によってしきりに眠らされていた。そして彼女はいまや45歳になる。[...]今日の貧しい農婦である彼女は、通常の状態においては、身持ちのよく、すこし悲しげで、穏やかでゆったりした、皆に対して温和で、とても臆病な女性である。彼女を見れば、自分の殻に閉じこもった人だと誰もが疑わないだろう。ようやくのことで眠らせると、移行期の後、「別の存在の目覚め」が不意に訪れる。これが変容である。顔つきはもはや同じではなく、両目は閉じられたままであるが、別の感覚の鋭さが視界の喪失を埋め合わせる。もはや彼女は陽気であり、騒々しく、落ち着きもない。彼女は善良なままであるが、皮肉や、辛辣な冗談を飛ばす奇異な性癖をもつようになった。(AP p. 129)

レオニーは、引っ込み思案で、物憂げな女性である。しかし、暗示をかけることで彼女は豹変する。あるいは、「別の存在」がレオニーに取って代わる。ここで姿を見せるのがレオニー2であり、「彼女」は普段のレオニーからは考えられないような振る舞いをする。それどころか信条までもが変化する。普段の彼女は、「掟を守るカトリック教徒」であったのに、夢遊病状態では「確信に満ちたプロテスタント教徒」になってしまうのである (AP p. 128)。

では、なぜこのような変化が起こるのか。ジャネは次のように考察した。

このように、レオニーには夢遊病の時しか知らない多数の事柄がある。この感覚、記憶、習慣、性格が総合であり、正常な人格を形成するシステムと同一のシステムであるということは、要素心理学の法則そのものには合致しないと思われる。一方の人格が、別の人格についていかなる観念も持たない、ということを知っているのは、覚醒状態とはまったく別の人格である。(AP p. 129)

正常な人格と同一のシステムから構成される別の人格。それが、レオニー2である。二重人格の事例においては、個々の知覚・感覚は統一した意識を形成するという、要素心理学の前提が崩れる¹⁹。つまり、もろもろの知覚・感覚は一つの全体である意識を形成することはない。ジャネの言葉を先取りして用いれば、意識下の、「潜在意識 (subconscience)」の領域に別の統一性を構成するのである。人間の意識は一つの層であるのではなく、その層の下部に別様の意識の層があると考えたところに、ジャネの独自性はあった。

このジャネ独自の潜在意識に関する理論は、次のように説明される。夢遊病状態において、患者の意識は相互に層を成している。例えば、リュシーの場合、リュシー1、リュシー2、リュシー3 という下位人格が同時に存在し、暗示を掛けることで、普段現れているリュシー1は眠りにつき、リュシー2が現れる。リュシー2も眠りにつくと、リュシー3が現れる。ジャネは、「第一次夢遊病状態 (premier somnambulisme)」、「第二次夢遊病状態 (second somnambulisme)」という用語を用いることで、この人格交代現象を説明する。

この人格交代現象の特徴は、リュシーという一人の人格の意識が二分化、三分化され、心理の統合度が低下するにつれて、潜在層に属する人格が顔を出すとするところである。ジャネが、解離を、「心理的統合不全 (désagrégation psychique)」として捉えるのは、こうした理論的背景による。

1.4 シモンドンにおける「分身化」の議論——「深い方向喪失」

しかし、シモンドンはジャネの理論に留まることで満足しない。先述のように、分身化モデルが採用される。ではこのモデルは、どのような理論的背景を

もっているのか。

前節の引用箇所少し前で、シモンドンは「分身化」に対応する現象について次のように説明している。

しかし、心理学者たちが「人格の二分化」と呼ぶものが、超個性性の研究において介在するのではないかと、自問することができる。[...] 二分化について考えさせざるを得ない精神性の研究というのがあるのである。それは、善と悪の間、天使と野獣の間での自己の分離である。人間の二重の本性を意識することに伴った分離である。また、世界における善の原理と悪の原理を規定するマニ教という神話に、見たところ投影された分離である。(ILFI pp. 283-284/277)

ここでいう「心理学者たち」には、もちろんジャンネも含まれていると見るのが妥当である。シモンドンは、彼らが「人格の二分化」と呼ぶものを、別の仕方で考えることを示唆している。それは、「超個体的なもの (le transindividuel)」という、心理的個性化 (内部的なもの) と集散的個性化 (外部的なもの) を結びつける役割を担うものとの関わりにおいて考えるということである²⁰。シモンドンは、この「超個体的なもの」について、精神性に部分的に対応すると別の箇所で述べている²¹。つまり「超個体的なもの」は、大まかにいえば、精神性に依拠した内部と外部の、心理と集団の媒介項である。

さて、シモンドンは、この「超個体的なもの」という一種の精神性の研究に、心理学者たちが「人格の二分化」と呼び、シモンドンが「分身化」ということで考える問題を結びつける。それはどういうことか。シモンドンによれば、この精神性を研究するに当たって、自己の分離、人間の二重の本性を考察する必要があるのだが、そこには善と悪、天使と野獣といったマニ教の二元論にも通ずる主題が関わってくる。とくに、シモンドンは、悪と野獣を掛け合わせた存在である、〈悪魔〉という形象に注目する。いわく、〈悪魔〉は悪の原理であるのみでなく、「自己自身に帰したくなく、自己がその責任を負うところのあらゆる過ち、あらゆる弱さの代わりに犠牲になるスケープゴートである」(ILFI p. 284/277)。さらにシモンドンは、(〈悪魔〉からの) 誘惑によって、人格の変容

は準備されると言う。つまり、その誘惑によって、存在はより下位のレベルへと転落する。シモンドンは、これを「自己に対する自己の転落 (*chute de soi-même sur soi-même*)」(*ibid.*)と呼ぶ。この転落が起きる時、存在は人間性を喪失した様相を呈する。その様相は、外面的に現れる。

シモンドンはここで、分身のことをすでに考えている。なぜなら、シモンドンは、〈悪魔〉ということで、自己に帰すことをためらう過ちの責任を負う「もう一人の自分」を考えているからである。この「もう一人の自分」は、分身にほかならない。私たちはこの分身に普段の自己であればしないことの原因を帰属させる。そして重要なことに、この分身には、「元々の自己」との連続性は存在しない。この分身は、あたかも実体的な性質を帯びているかのように、自己に対立した存在であるかのように現れるのである。分身という存在の異質性について、シモンドンは次のように説明する。

もし人間が同じレベルで生き、思考するなら、おそらく二分化は存在しないだろう。しかし、上位のレベルから下位のレベルへの転落が、自己喪失の印象を与えるのは、どうやって説明されるのだろうか。おそらく超個体的なものの現前が、その時欠けているからである。また、主体は次のことを理解するからである。かの存在は、新しい価値を軸として修正され、その価値は古き価値とくらべて、厳密には凡庸ではないし、完全に敵対的でもないのだが、ただ古き価値に対して異質なのである。(Ibid.)

このように、シモンドンは「超個体的なもの」の喪失という観点から、自己喪失 (*aliénation*) を説明する。これは、自分の内部を外部に、つまり心理的側面を社会的側面につなぎとめるものを失ってしまった状態である。例えば、一つの共同体を仮定してみると、かの存在とは、この共同体の規範から逸脱した過激な価値観をもつことが明らかになったという理由により、共同体の外部へと放逐されるようなものである。この時、かの存在は、まるで〈悪魔〉に誘惑され、それまでの自己を喪失してしまったかのように見えるだろう。

ただ、シモンドンは〈悪魔〉という実体的な形象を持ち出すことには満足しない。シモンドンは、〈悪魔〉からの誘惑だけでなく、「参照体系の偏心」と呼

ばれるものによって二分化が生じるとする。

もし同時に、参照体系の偏心がなかったら、下位レベルへの転落が、それだけで二分化の原因となることはありえないだろう。もし低い価値が、高い価値との類比的な関係のなかに置かれるならば、もしあるレベルから別のレベルへの垂直的な転落だけがあるなら、誘惑のなかで心に生じる深い方向喪失が現れることはないだろう。(Ibid.)

「低い価値」は、もはや「高い価値」との類比によっては捉えられない。それは、単なる転落ではないのだ。その価値が承認不可能なものとなる時、はじめて「深い方向喪失」が生じるのである (ibid.)。シモンドンはこの議論を「非対称的な関係」から説明しようとする。

方向喪失を悪の侵入としたのは、価値の中立性に鑑みてのことであり、悪を善と対をなすものとしたのは、表現の便宜のためである。もし悪が善と対をなすものであるなら、自己は自己自身に対して決して異質なものにはなりえないだろう。ここには、本質的に非対称的な関係がある。(Ibid. pp. 277-278)

そして二つの本性の実体論的な観念は、この関係を説明可能にするには、対称性の図式にまだあまりに近い。善と悪の、あるいは天使と野獣の対称的な関係において二分化を理解するのは、図式的な理解である。だから、転落という言葉でさえ十分ではない。シモンドンは、むしろ、変化する以前の自己と、変化した後の自己を比較すること、前者と後者に対して同じ価値体系に依拠して何がしかの判断を下すことの不可能性を考えようとしているのではないか²¹。自己が自己自身に対して決定的に異質である事態。これは、善と悪、天使と野獣に引き裂かれる自己というよりかは、「新しい自己」を「古い自己」の延長線上に置くことができず、自らの羅針盤を失ったまま漂流しつづける主体の姿を露わにしているように思われる。

2. 分身と個体化の問題系——ユングとシモンドン

このようにして主体を捉えるシモンドンの議論は、ジャネの二分化モデルでは捉え切れない要素を孕んでいる。いわゆる分身化モデルを明確化するために、私たちは、分身 (double) の概念について考察を深める必要がある。その助けとなりうるのは、ユングの学説である。ユングは、影、アニマ、アニムスを始めとする下位人格の考察を通して、「人格の分身化」とシモンドンが呼ぶ心的現実を捉えていたと思われるからである。本章ではこの問題を考察したい。

2.1 ユングにおける元型の主題 (1) ——影

ユング心理学には、分身に相当するものの一つとして影 (shadow) の概念がある。影は、アニマ、アニムス、太母、老賢者などとともに元型 (archetype) の一群を成している²²。影について、ユングは次のように述べている。

影ということで、私は人格の「否定的」側面を意味している。それは、十分に開発されてこなかった個人的無意識の内容・機能も含めて、私たちが表に出したがいらない不快な性質をもったものの集合である。(アンソニー・ストー、101 頁。CW7 para. 103n)

この影について、河合隼雄は、「その個人の意識によって生きられなかった反面、その個人が認容しがたいとしている心的内容」、「自分の生きてこなかった半面、いわば自分の黒い分身」であると解説している²³。ユングと河合の説明にともに見られるのは、影が主に個人的無意識を映し出すものであり、個人の劣等機能にかかっているという認識である²⁴。ユングにおいて、影を意識化することが、無意識との対決における一つの重要な契機とされている²⁵。

影は、自我の人格全体に挑戦してくる道徳的問題である。なぜなら、かなりの道徳的努力がなければ、影を意識化することはできないからである。影を意識化するということは、人格の暗い側面が現実中存在しているのだ

ということ認めることにほかならない。この行為は、どんなかたちであれ自分を知るうえで欠くことのできない本質的条件であるが、それゆえに、通常かなりの抵抗に出会うことになるのである。(ストー、105頁。CW9ii para. 14)

ユングによれば、影を意識化する過程で強い抵抗に出会うのは、投影の機制にかかわっている。無意識が他者に投げかけた影に意識は出会う。投影が働いた他者については、激しい情動に悩まされことになる。ただ、その情動は他者ではなく、自身の影に起因する。自身の影を他者に帰属させることで、自身の不快な一面が複製されたものとして他者の内面を理解してしまう。

ユングは、この影は主として個人的内容にかかわるため、それを意識化するのは比較的簡単であるとしている。しかし、例えば、ドストエフスキーは『分身』において、この影がいかにか個人に困難な運命を課すかを描き切っている。当書において、ドストエフスキーは、分身が独立した実在であるかのように感じられる心的現実に向っている。

ただ、ユングが、影という概念によって、ドストエフスキーの主人公に見られる事態までを想定していたかは、議論の余地がある。本稿にとってあくまで重要であるのは、ユングが、影について「人格の「否定的」側面」にかかわるとしたことである。それは、影を、個人の暗い側面として捉えているということである。この意味で、影は分身であるが、シモンドンの言う「超個体的なもの」の性質を満たすと言うのは早計だろう²⁶。

2.2 ユングにおける元型の主題 (2) ——ペルソナ、アニマ/アニムス

ユングは、影のほかにアニマ、アニムスという重要な元型を想定している。(ストー、105頁。CW9ii, para. 13) アニマに関しては、約言すれば、男性における女性の無意識の心像である。アニムスは、同じく女性における男性の無意識の心像である²⁷。

アニマ/アニムスについては、ペルソナとの関連で理解されるものである。したがって、まずペルソナについてのユングの記述を確認しよう。

ペルソナは、個人的無意識と社会の間の複雑な関係システムである。一方では他者に一定の印象を与え、他方では個人の本当の姿を隠すという、いわば一種の仮面の役割を果たしている。(ストー、108 頁。CW7 para. 305)

ペルソナは、この意味で、個人の外界に対する態度にかかわる。外的適応を成し遂げるために重要であるのが、このペルソナを発達させることである。実際、個人は、置かれた環境によって異なる社会的役割を期待される。この役割を器用に演じ分けることができるのは、その個人のペルソナに可塑性があり、場面場面に応じて異なる自分を見せることができるからである。

ただ、ユングは、ペルソナと自己の同一化を危険視する²⁸。なぜなら、それは、自分の役割から抜けられなくなることであり、ひいては神経症の原因であるからだ。個人が自分の個性を十分に発揮するという意味での「自己実現」を行うためには、ペルソナを相対化する必要がある。

そして、ペルソナの相対化は、自己自身のアニマ／アニムスを統合することによって行われる。アニマ／アニムスは、個人の内界に対する態度にかかわる。ユングはアニマについて、次のように述べている。

私は […]「アニマ」という用語を提案している。この言葉は、「魂」という表現ではあまりに一般的で、また曖昧になってしまうある特殊なものを指し示している。アニマという概念のもとに集約された経験的事実は、無意識のきわめて劇的な内容から形成されている。(ストー、125 頁。CW9ii para. 25)

投影を構成する要因はアニマである。あるいはむしろ、アニマによって表わされる無意識と言えるかもしれない。夢であれ、ヴィジョンであれ、ファンタジーであれ、アニマが現われるときはつねに人格化され、その具象化するものには女性性もっている特徴すべてが含まれている。(ストー、126 頁。CW9ii para. 26)

つまり、アニマは投影を働かせる要因そのものである。そして、それは女性

的なものをすべて含みこむような象徴的形象である。アニマが、集合的無意識にかかわっているのは、それが、母、娘、姉妹、友人、恋人といった、いたるところに存在する女性性のイメージを担っているからにほかならない。男性の場合、内界にこのアニマの象徴が存在し、たとえば公で非常に男性的なペルソナをもつ人は、かえって私的な場面では感傷的な側面やルサンチマンをさらけ出すものである。これは、その個人のペルソナから零れ落ちてしまった側面がアニマとして現れることで、その人の行動に影響を及ぼしていると説明される。アニムスに関しても同様に、女性の内界において、男性性のすべてを含むよう構成されている。女性におけるアニムスの表現として、ユングが挙げるのは、頑固な意見、自説への拘泥などである²⁹。

アニマ／アニムスはこのように、良くも悪くもペルソナを補償する役割がある。それらの否定的な側面については上で述べたが、肯定的な側面としては、アニマについては男性に関係性の意識を与えること、他方でアニムスについては女性に考察、熟慮、自己認識の能力を与えることを、ユングは挙げる（スト一、129頁。CW9ii, para. 33）。

2.3 シモンドンのユング解釈——知られざるものの具現化＝擬人化

このように、アニマ／アニムスという集合的無意識にかかわる元型を想定するユングの姿勢は、「超個体的なもの」を想定するシモンドンと共通する部分がある。そして、アニマ／アニムスという概念は、シモンドンが想定する分身化の条件を満たしてもいる。つまり、アニマ／アニムスとも、〈私〉の外部、つまり個体的な次元の外部に構成される分身である。分身としてのアニマ／アニムスを想定することで、解離を正常心理学の文脈において扱おうとしたことがユングの大きな特徴であると思われる³⁰。

このユング心理学について、シモンドンは「現代心理学の基盤」で次のように説明している。

私たちの魂は、意識と集合的無意識から構成されている。[…] 意識は、ちょうど海に浮かんだ小舟のように、私たちの魂の弱い部分でしかない。無意識は、私たちの意識的〈私〉を補償し、訂正し、指示する。無意識は、

〈私〉を照らし出した真の創造的活動を保持することができる。象徴夢と直観は、予感の価値を有している。原初的なものにおいて出会われる親しみ深い精神あるいは悪魔への信仰は、次のことに由来する。すなわち、集合的無意識から湧き出る心理的諸要素は、〈私〉の外部にある真の人格を備えているのである。(FPC p. 138)

このように、シモンドンは、ユングの元型論をなぞりながら、独自の解釈を付け加える。それは、意識が弱い部分であり、集合的無意識は意識的〈私〉を導くものである、ということである。そして「集合的無意識から湧き出る心理的諸要素」、「〈私〉の外部にある真の人格」ということで想定されているのは、アニマでありアニムスの元型である³¹。要するに、シモンドンのユング解釈の特徴は、アニマ／アニムスに〈私〉を主導する役割を認めていることである。

そしてシモンドンの記述は、魂へと向かう。魂に身体的側面と精神的側面を認めたとうえで、シモンドンは次のように続ける。

魂としての知られざるものが具現化＝擬人化されるなら、「それは、性の種別化の、若さと老いの、生と死の余白で生きる、千年・二千年のほとんど不死の経験に支えられた、集合的な人間存在の特徴を帯びるだろう」。魂は、人間種の形成に先立つ系統発生的な段階の長い記憶を含んでさえいるのである。(FPC p. 139)

こうして、シモンドンは、集合的無意識に根差した「個体における人間性の受肉」(ibid.)をユングの議論のうちに見て取る。集合的無意識を、個体における人間性の表現につなげること。その点に、シモンドンのユング読解の独自性があると思われる。それにより、「〈私〉は、無意識により徹底して基づきながら、その基盤を拡げ、深め、安定化させる。意識的存在と識別された個体の構造を維持しながら、〈私〉は、ペルソナの見かけから自由になり、集合的実在に参与することで無意識の諸力を組織し、現実にも適合するのである」(ibid.)。これが、個体にとってもっとも好ましい解決、つまり「個体化」という心理的過程であると、シモンドンはユングに代わって説明するのである。

2.4 ユングとシモンドンの分岐点——「準安定」の導入

以上の考察を通じて、シモンドンとユングには、分身を通して心理的な水準の「個体化」を考えたという大きな共通点があることが確認された。しかし、この両者の差異を指摘する研究もすでに存在する。

例えば、シャボは、シモンドンとユングの分岐点を、シモンドンが個体化に加え、「個性化 (individualisation)」の概念を導入する点に認めている³²。しかし、むしろ、本稿ではシモンドンの個体化論が、ユングのそれとは異なって目的論的でないことに注目したい。

この点に関して、ネヴェスの論文は重要である³³。ネヴェスは、シモンドンとユングの個体化を比較しており、両者の共通点と差異を明らかにしている。ネヴェスによれば、両者とも個体化の問いを通じて、人間の自己自身と、そして自身の環境との複雑な関係に取り組んでいる。しかし、両者の間には差異も存在する。それは、個体化に目的を認めるか否かという差異である。一方で、ユングは自己の統合、つまり世界に対して安定し、開かれた個体的存在になることに個体化の目的を認めた。ネヴェスは、これを「浸透性のある膜」の状態に擬えている。他方で、シモンドンの個体化には目的がない³⁴。つまり、シモンドンは緊張のただ中にある、いわば不安定で流動的な個体を想定している³⁵。

この差異は、実に根本的である。何より、ユングにとって個体化は自己実現の過程である。影、アニマ、アニムスといった元型に同一化することなく、それらを統合していくことが、自己実現の過程とされる。しかし、繰り返しになるが、シモンドンにおいて個体化は一つの目的に向かうものではない。したがって、シモンドンの個体化論では、ユングとは異なり、安定した個体の状態が目標設定されることはない。

では、ネヴェスの言うように、その個体はただ不安定で流動的であるだけなのだろうか。実のところ、不安定と準安定は異なる概念である。準安定には、ある種の平衡状態が認められる。シモンドンは、博士主論文序論で、「準安定的平衡 (équilibre métastable)」について次のように述べている。

人々は平衡の唯一の形式、つまり安定的平衡しか知らなかったのも、個体化は適切に考察・描出されえなかった。準安定的平衡を知らなかったのも

ある。存在は、安定的平衡の状態ですべてのうちに想定されていた。さて、安定的平衡は、生成を締め出している。なぜなら、安定的平衡は、可能なポテンシャルエネルギーのもっとも低い水準に対応するからである。安定的平衡は、あらゆる可能な変容が実現された時、いかなる力ももはや存在しない時、システムにおいて達成される平衡である。あらゆるポテンシャルが現実化されてしまい、もっとも低いエネルギー水準に達したシステムは、新たに変容することはできない。古代人は、不安定と安定、運動と静止しか知らなかった。彼らは、明白かつ客観的に準安定を知らなかったのである。(ILFI p. 26/26)

シモンドンが言うように、準安定を定義するには、科学の発展を待つほかなかった (ILFI p. 26, note 3/p. 26 note. 4)。具体的には、準安定的平衡は、熱力学において、過融解や過飽和の状態のように、存在が次の位相に（例えば、液体から固体に）転移するべき状態であるにもかかわらず、以前の位相に留まっている状態を表している。それは不安定であるが、何らかの条件のもとで暫定的に安定する状態である。それに対して、安定的平衡は系が安定し、相転移による変化が起きない状態である。

シモンドンの議論のわかりづらさは、この準安定状態がつねになくならないうえに、個体化が永続的に続くことを、肯定していたところにある。一般に、準安定の状態に強い乱れが加わることで、急に安定状態に落ち込むことがあるとされる。ある一定の状態において安定することは、個体化の終結である。個体以前のポテンシャルエネルギーが残っていることが、個体化が直面するさまざまな問題に対する解を導き出すこと条件である³⁶。

シモンドンは、したがって抽象的な元型、つまり影、アニマ、アニムスなどの統合によって、個体が自己実現するというユングの筋立てとも距離を置いていることになる。シモンドンは、当の主体が置かれている現実的な状況のなかで、さまざまな個別具体的な問題に直面し、それをひとつひとつ乗り越えていく主体の姿を、個体化論を通して描き出そうとしていたのではない。

今後、この問いかけに答えるために、問題解決の主体という観点から、シモンドンの個体化論を再構成していきたい。

註

1. ただし岡野は、「心理的な統合」という表現の曖昧さを指摘している。というのも、近年になり、schizophrenia の訳語が、精神分裂病から統合失調症に変化したからであり、「統合」が失われるという、精神病であると理解されてもおかしくないからである。岡野は、解離性障害と、統合失調症を厳密に区別しており、統合失調症についても「連合失調症」と呼ぶべきだと主張している。Cf. 岡野憲一郎 『解離性障害——多重人格の理解と治療』 岩崎学術出版会, 2007, 1, 16–17, 86 頁。
2. "Dissociative Disorder": "Dissociative disorders are characterized by a disruption of and/or discontinuity in the normal integration of consciousness, memory, identity, emotion, perception, body representation, motor control, and behavior". (最終アクセス日時: 2017/11/24) <http://dsm.psychiatryonline.org/doi/10.1176/appi.books.9780890425596.dsm08>
3. Cf. 岡野, 前掲書, 26 頁。しかし、岡野が参照しているのは、DSM-IV, ICD-10 であることに注意されたい。
4. Colin A. Ross, *Dissociative identity disorder: diagnosis, clinical features, and treatment of multiple personality*, 2nd ed., New York, Wiley, 1997, pp. 115–119.
5. Théodule Ribot, *Les maladies de la personnalité*, Paris, Félix Alcan, 1921.
6. 河野によれば、リボーは、1860年代までの社会的・宗教的に保守的な傾向を持つフランス心理学の三つの潮流に抗して、現代的な科学的心理学を成立させた人物のうちの一人である。その三つの潮流とは、河野の整理によれば、(1) 感覚論・観念学派、(2) エクлекティスム (折衷主義)・スプリチュアリズム、(3) 生理学主義・実証主義である。しかしながら、これら三つの潮流について、河野は、いずれも現代的な心理学とは程遠い内容であると批判する。科学的心理学の基盤は、1870年代以降ようやくフランスでも成立する。フランス科学的心理学には二つの潮流があり、片方が(シャルコーとピネらの)精神医学・臨床心理学の潮流、もう片方が(イポリット・テヌとリボーらの)「実験心理学」の潮流である。ただし河野は、後者の「実験心理学」の潮流も、実際には臨床心理学的・精神病理学的であったと主張する。Cf. 河野哲也「フランス心理学の誕生——なぜフランスでは「実験心理学」が成立しなかったのか」 金森修編 『エピステモロジーの現在』 慶応義塾大学出版会, 2008, 254–272 頁。
7. この背景には、リボーが、中枢神経の階層性を想定したヒューリング・ジャクソンの影響を受け、高次中枢が下位中枢を統合すると考えたことがある。
8. この段落の記述は次を参照した。同上, 285 頁。
9. ちなみに、ジャネが「意識の解離」という言葉を用いたのと同年に、ジャネのライバルであったアルフレッド・ピネも同じ言葉を用いて解離現象について述べている。Cf. Étienne Trillat, *Histoire de l'hystérie*, Paris, Seghers, 1986, p. 190 [エティエンヌ・トリア 『ヒステリーの歴史』 安田一郎・横倉れい訳, 青土社, 1998, 230–231 頁]。
10. ジャネは、症例の観察と記述にもとづく分析を心がけており、形而上学的概念の導入といった心理学の範囲を越えることに対しては禁欲的であった(この点が、エクлекティスムとの違いであろう)。またジャネは、メスメルに代表される18世紀の動物磁気治療に関心を示し、とくに「ラポール」という治療者と患者の心的交流の重要性をそこから学んだと言われている。Cf. 松本雅彦 「ピエール・ジャネ——ヒステリーに「無意識」をみる」 『思想』 第1068号, 岩波書店, 2013, 178–179 頁。
11. この辺の事情は、次の著作に詳しい。Henri F. Ellenberger, *The discovery of the unconscious : the history and evolution of dynamic psychiatry*, New York, Basic books, 1970,

- p. 341 [アンリ・エレンベルガー 『無意識の発見 (上)』 新田義弘ほか編、東京、弘文堂、1980、397頁] .
12. イアン・ハッキング 『記憶を書きかえる——多重人格と心のメカニズム』 北沢格訳、早川書房、1998、167頁。[Ian Hacking, *Rewriting the soul : multiple personality and the sciences of memory*, Princeton, N.J., Princeton University Press, 1995, p. 134].
 13. 同上。[*Ibid.*]
 14. 同上、168頁。[*Ibid.*] この点に関して、アメリカにおける初期の解離研究者としてモートン・プリンスの名が(ハッキングによって)挙げられている。
 15. ジャネとフロイトの対称性ということであれば、その他に、ジャネが催眠暗示を心理療法の方法論として用い続けたことがある。他方で、フロイトに関しては、催眠暗示があまり上手くなかったということが、結果として、自由連想法という画期的な手法の考案につながった。Cf. 松本雅彦、前掲論文、166頁。
 16. さらに、シモンドンはジャネのことを、博士論文執筆時に書かれた草稿「現代心理学の基盤」において、高く評価している。シモンドンによれば、ジャネは、(リボーが予告した)力動心理学を打ち立てたのみでなく、心理学に深層の次元を付加した。シモンドンは、ジャネのことを「地質学者 (géologue)」と呼んでおり、単に(心理学的な)表層の布置を分析したのみでなく、垂直的な説明を行った点が特徴的であるとす。それはつまり、有機的・本能的な生から、意識や行為がいかにして生成するのか、という問題を考察したという点で、ジャネを評価しているということである。Cf. FPC, pp. 61–62.
 17. ただ、少なくとも、シモンドンはフロイトの研究を否定しているわけではない。「フロイトは厳密には、無意識を発見したのではない。周知のように、ジャネは、ある種のヒステリー症状が、彼が「潜在意識の固定観念」と呼んだ、無意識の表象に支配されていることを [すでに] 明らかにしていたからだ」。つまり、シモンドンは、フロイトの無意識は、すでに潜在意識とジャネが呼んだものによって記述されていたと考えているのである。これは、要するに、フロイトではなくジャネに無意識の先取権を認めているということである。他方で、無意識に関するフロイトの意義を、次の点に認めている。「フロイトは、前意識と真の深い無意識、つまりより本質的・力動的で、より未分化なエスを区別することで、無意識の研究を明確化したのである。エスの諸要素は、自発的に意識に思い起こされることはありえない」。Cf. *Ibid.*, pp. 68–69.
 18. David Scott, *Gilbert Simondon's psychic and collective individuation: A critical introduction and guide*, Edinburgh, Edinburgh University Press, 2012, p. 117.
 19. ヴントやティチナーによって代表される要素主義心理学においては、意識の過程は最小単位である要素にまで還元される。これら要素の組み合わせによって、どのような心的内容が生じるのかは決定される。この法則は「心的要素の結合法則」といわれる。
 20. シモンドンは次のように書いている。「二つの個体化、つまり心理的・集散的個体化は、互いに関連しつつ双方向的である。それらは、内部的(心理的)個体化と、外部的(集散的)個体化の体系的な統一性を説明することを狙いとした、超個体的なものというカテゴリーを規定することを可能にする」。Cf. ILFI, p. 29/29. さらに、この箇所が続いて、シモンドンは次のように述べる。「超個体的なもの心理-社会的世界は、未開社会的なものでも、間個体的なものでもない。その世界は、諸個体に結びついた前個体的な実在に基づく個体化の真の操作を前提とし、その操作は固有の準安定性を有する新しい問題系を構成することができるのである」。つまり、「超個体的なもの」は、前個体的な位相に根ざした「個体化の真の操作」によって形成され、心理-社会的世界にかかわるような新しい問題系を提出することができるのである。Cf. *ibid.*

21. だから、シモンドンの「非対称的な関係」は、むしろ不可逆的な関係として理解される事態であるように思われる。
22. 正確には、元型は集合的無意識にかかわるものであり、影がもつばら個人的無意識にのみかかわる際には、その影を元型と呼ぶことはできない。元型とは、河合隼雄の明晰な定式化によれば、「人間の普遍的無意識の内容の表現のなかに、共通した基本的な型」のことである。元型的な体験がなされる時、「われわれの合理的知性にみられるような絶対的な区別がなく、主体と客体との不可思議な一体化が生じる」と河合はする。さらに河合によれば、ユングはこの一体化を、レヴィ・ブリュルの「神秘的関与 (participation mystique)」を用いて説明している。いずれにせよ、シモンドンが、個体-環境に先行する「前個体的な位相」を強調する際に含意しているものと、ユングの元型概念は通ずるものがある。Cf. 河合隼雄 『ユング心理学入門——〈心理療法〉コレクション I』 岩波書店, 2009, 78, 83 頁。
23. 同上, 86-88 頁。
24. 劣等機能とは、個人においてもっとも開発されていない心理機能のこと。ユングは、思考、感情、感覚、直観という四機能を想定しており、思考は感情と、感覚は直観と対応する。この対応関係は、思考機能がもっとも発展している時、感情機能は劣等機能になる、という仕方であり立っている。詳しくは、次を参照。同上, 15-28 頁。
25. 例えば、次を参照。C・A・マイヤー 『個性化の過程——ユングの類型論よりみた人格論』 河合隼雄監修、氏原寛訳、創元社, 1993, 98-110 頁。
26. さらに、(「人格の「否定的」側面」, 「人格の暗い側面」にかかわる) 影を「別の人格」と見なすことも難しいだろう。それはあくまで同一人格の否定的側面に關わる一側面である。
27. 対照的に、影は、同性の心像によって象徴される。
28. 「周囲に適合したペルソナを形成することは、外界にたいする多大な譲歩を意味し、またそれは、ペルソナに自我をそのまま同一化させてしまうという真の自己犠牲につながる。この結果、装っている自分こそが、自分自身である、と信じてしまう人々が現実存在してくることになる」。同上、109 頁。CW7, para. 306.
29. ただ、ユングの女性に対する評価は、男性に対するそれよりも相対的に低い可能性があることに注意を促しておきたい。例えば、次の記述にその「女性蔑視」的な視線が現れている。「女性の意識を特徴づけるのは識別や認識と結びついているロゴスというよりもエロスのもつ結合性である」、「女性ではエロスは彼女たちの真の性質を表現するが、ロゴスの方はしばしば遺憾極まりない事件にしかならない。そしてロゴスは友達や家族間に誤解や苛立たしい説明を引き起こす。なぜなら女性のロゴスは、考察ではなく〈意見〉から成り立っているからである」。同上、127 頁。CW9ii, para. 29.
30. 「以上の考察 [インテリ男性の、社会の期待・要求に合わせた公的人格と、快適さや情緒的要求によって作られた私的な人格のどちらが真の人格と言えるのか、という問いかけ] によって、性格の分裂というものが正常な人間においてすら起こりうるということが分かるだろう。したがって、人格解離の問題を正常な人の心理学として扱うことは決して間違っていない」。同上、113 頁。CW6, para. 799.
31. より正確には、シモンドンは〈私〉と集合的無意識の間に、それらを媒介する元型として、アニマ/アニムスがあるとしている。「〈私〉と集合的無意識の間に、無意識の諸要素が介在するようにして、女性においてはアニムスが、男性においてはアニマが付け加わる。例えば男性には男らしさや厳格さを割り当てさせることで、ペルソナが〈私〉にあまりに多くの影響を与える時、補償的役割を果たすのである」。Cf. FPC,

- p. 138.
- ³² Pascal Chabot, *op. cit.*, p. 113.
- ³³ José Pinheiro Neves, « Pour comprendre les nouvelles liaisons digitales : le concept d'individuation chez Carl Jung et Gilbert Simondon », *Sociétés*, n. 111, 2011, pp. 105–114.
- ³⁴ ネヴェスは次のように述べている。「シモンドンの思想は、次の見解を強調している。つまり、人間的な安定した統一性はなく、目的性のある個体は存在しない」。 *ibid.*, p. 109.
- ³⁵ ネヴェスは、この差異を、両者における「治療」の問題の表明のされ方の違いという点から説明している。ユングにとっては心理療法の問題がつねに中心的であるが、シモンドンにとってはそうではない。しかし、シモンドンにおいては、「存在の一義性」と、知覚の変換としての個体化を意識することが、治療行為のように機能するのだと、ネヴェスはシモンドンの個体化論を「弁護」する。 Cf. *ibid.*, p. 110.
- ³⁶ シモンドンは、構成された個体には、ポテンシャルエネルギーによって活性化される前個体的な実在が結びついているという仮説を立てる。個体化において個体はつねに、ポテンシャルエネルギーを通じた変化に開かれているのである。 Cf. ILFI, p. 28/28.

略号一覧

シモンドンのテキストの略号

FPC: « Fondements de la psychologie contemporaine (1956) », in Gilbert Simondon, *Sur la psychologie*, Paris, Presses universitaires de France, 2015, pp. 19-270.
ILFI: *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information*, Grenoble, Jérôme Millon, 2005/2013.

ジャネのテキストの略号

AP: Pierre Janet, *L'automatisme psychologique : essai de psychologie expérimentale sur les formes inférieures de l'activité humaine*, Paris, Forgotten Books, 2015.
〔ピエール・ジャネ『心理学的自動症——人間行動の低次の諸形式に関する実験心理学試論』 松本雅彦訳、みすず書房、2013〕

ユングのテキストの略号

CW6: C. G. Jung, *Psychologische Typen*, herausgegeben von Marianne Niehus-Jung, Lena Hurwitz-Eisner, Franz Riklin, Olten, Walter-Verlag, 1978.
CW7: C.G. Jung, *Zwei Schriften über analytische Psychologie*, Herausgeber Marianne Niehus-Jung, Lena Hurwitz-Eisner, Franz Riklin, Bd. 7, Olten, Walter-Verlag, 1971.
CW9ii: C.G. Jung, *Aion : Beiträge zur Symbolik des Selbst*, herausgegeben von Lilly Jung-Merker, Phil Elisabeth Rüb, Bd. 9-2, Olten, Walter-Verlag, 1976.
〔アンソニー・ストー編著『エッセンシャル・ユング——ユングが語るユング心理学』 山中康裕監修、菅野信夫ほか訳、創元社、1997〕
なお、邦訳にあたって既訳を参考にし、適宜表現を変えて使用した。

謝辞

本稿は、総合文化研究科に提出の修士論文「シモンドンにおける心理的個性化の問題 ―深層心理学からの影響に着目して―」の第一部に当たる。指導いただいた原和之先生に加え、発表当日に様々な観点から助言いただいた質問者の皆様方に感謝の意を申し上げたい。